シノドスへの歩み　みことばと共に
三位一体の主日C年

小西広志

2022 年 6 月 12 日

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは、教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 6 月 12 日、三位一体の主日となっています。今日の三つの朗読箇所をシノドス的な観点から読んで味わってみましょう。

その道を初めにわたしに造られた

今日の第一朗読は『箴言』からとられています。『箴言』は長い時間をかけて成立した文書です。様々な時代の知恵を収集して編纂されました。もっとも古いものはソロモン王の時代の格言を集めた 10 章 1 節-22 章 16 節です。今日の朗読箇所は 1 章-9 章の最も新しい箇所から取られています。捕囚後に成立したと考えられます。ここでは知恵は「擬人化」されています。知恵の起源とその本質が述べられています。8 章は「知恵が呼びかけ……城門の通路で呼ばわっている」と始まり、4 節から知恵の呼びかけがありあます。同様に、今日の朗読箇所も知恵の呼びかけの一部となります。「わたし」とは擬人化された知恵のことです。

冒頭の 22 節をフランシスコ会訳で呼んでみますと「主は、その働きの初穂として、その業の初めに、わたしを造られた」となっています。ですから、知恵は天地創造の前からあったのでしょう。新改訳改訂第 3 版はその点がはっきりとしています。「【主】は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた」。新共同訳、フランシスコ会訳で「造られた」、新改訳で「得ておられた」はヘブライ語ではカーナーだそうです。本来は「買う、手に入れる」という意味で、「創造する」という意味では 4 回だけ使われているそうです。日本語の翻訳が少し難しい言葉かもしれません。バルバロ訳では「有しておられた」と「造られた」という表現を避けて、知恵が造られたものでないことを伝えようとしています。

ヘブライ語聖書がギリシア語に訳された時（LXX 訳、七十人訳)、ここは「クティゾー」というギリシア語が当てはめられ、それを根拠にアレクサンドリアの司祭アレイオス（250-336）は御子は造られた者だと主張しました。これでは、御子の神性が失われてしまいますので、異端としてこの主張は退けられます（アレイオス論争)。

義とされる

　第二朗読はパウロの『ローマの信徒への手紙』から読まれます。冒頭のことば「義とされる」に注目してください。「義とする」とは法律的な概念で「公平に扱う、正しく裁く」の意味ですが、パウロは受動態で用いて、人が「無罪とされる、神からの賜物である義を受ける」の意味で使っています。また「信仰」は律法と反対の意味を持ち、自分で努力して到達したり、得られるものではありません。さらに人から賞賛される「信心深さ」ではありません。「信仰」とは神が人間に差し出してくれた救いを受け入れることです。こうして神によって「義とされる」のです。

言っておきたいことは

　今日の福音朗読は、受難を前にしたイエスさまが弟子たちに語った箇所となります。いわゆる「告別説教」の一部分です。聖霊の果たす役割が明らかになります。

　告別説教でイエスさまは自分が父のもとへと戻ること、弟子たちが守るべき互いに愛しあいなさいという掟、そして残された弟子たちがこの世から迫害を受けるだろうということを伝えています。しかし、いよいよイエスさまのことばが終わりに近づき、言っておきたいことはたくさんあるが、弟子たちは理解できないとイエスは語ります。今日の朗読の冒頭ですね（12 節)。フランシスコ会訳では「今、あなた方はそれに耐えることができない」となっています。

　この箇所には二つの理解の可能性があるでしょう。まず、聞いて理解するに耐えられないという意味で捉えることができます。そして、イエスさまが語ることばが、やがて引き起こる迫害では弟子たちは担いきれない、耐えられないとも理解することができるでしょう。弟子たちはイエスさまの語ることばが理解できてますが、しかし、厳しい迫害の渦中では、イエスさまのことばを支えにして、担うことができないだろうという意味です。どちらの意味も含んでいて、弟子たちはイエスさまのことばの意味が充分に理解できないし、同時にイエスさまのことばを保ち続け、それを伝えるだけの勇気もないのです。

　だからこそ、イエスさまは真理の霊である聖霊を弟子たちに派遣することを約束したのでしょう。13 節にある「導いて」の「導く」はホデーゲオーだそうですが、道案内人のホデーゴスから派生した単語だそうです。文字どおりには「道案内する、導く」ですが、そこから展開して「指導する、手ほどきして教える」の意味も生じるそうです。ここでは真理の霊が弟子たちを導けるのは、御父と御子から聞いたことを語り、手ほどきして教えてくれるからです。

まとめ

　三位一体の教えが成立する歴史的な経緯はともかくとして、三位一体の教えは神さまから教会に示された（啓示された）教えです。復活なさったイエスさまとの出会いの事実、そのイエスさまによって救われたという実感、だから、復活なさったイエスさまは救い主キリストであるという確信という一連の体験は、古代の教

会の人々にとっても、現代を生きるわたしたちにとっても信仰の中心をなすものです。救い主イエス・キリストについての理解を深めようとすればするほど、この方がどこからいらした方で、どういった方で、どこへと向かわれて、今なにをなさっているのかが気になります。つまり、キリストへの探究心が目覚めます。聖書（旧約聖書も新約聖書も）を丹念に読んで、しかも、生前のイエスさまのことばを、今、ここに語られている生きたことばとして耳を傾けてみると、イエスさまが天の御父の「ひとり子」であることに気づきますし、天の御父と「ひとり子」である御子はいつも聖霊を送ってくださりわたしたちを助けてくださることにも気づきます。つまり、三位一体の教えとは、わたしたちが抱く神さまへの信頼、イエスさまとの親しい交わり、そして生きていこうとするいのちへの躍動を土台として生まれ、しかも古代の教会の中で洗練されていった教えなのです。

　そして、この教えは神秘の一端を伝えるものです。ですから、理解できなくても心配ないのです。むしろ、神は父と子と聖霊の三位にして、同時に一体なのだをこころに留めておくことが大切だとわたしは思います。

　それではまた来週